

すな　くに　おうじ  
砂の国のウィル王子

作　　：ぶっちー  
初期原案：わんぱくおじさん

sample

An illustration of a young prince with orange hair and a crown, wearing a red cape and dark boots, standing on a dark mound of sand. He is looking towards the right. The background is a vast desert landscape with rolling sand dunes in shades of orange and yellow. In the upper left, a silhouette of a castle with multiple towers is visible against a clear blue sky. A bright sun is partially obscured by a large, semi-transparent 'sample' watermark in the center of the image.



sample

むかしむかしのおはなしです。

あるところに<sup>すな</sup>砂の<sup>くに</sup>国がありました。

まっかな<sup>たいよう</sup>太陽が<sup>くに</sup>国を<sup>て</sup>照りつける あついあつい<sup>くに</sup>国です。

しかし、はじめから<sup>さばく</sup>砂漠だったわけではありません。

この<sup>くに</sup>国には<sup>すうねん</sup>数年の間、<sup>あいだ</sup>雨が<sup>あめ</sup>ふっておらず、

かつてあった<sup>うつく</sup>美しい<sup>みずうみ</sup>湖も、<sup>あおあお</sup>青々とした<sup>き</sup>木々もなくなり、

いつしか<sup>さばく</sup>砂漠のようにひからびてしまったのでした。

びょうきで寝こんでしまった<sup>おう</sup>王さまは、  
となりの<sup>くに</sup>国にすんでいる<sup>まじょ</sup>魔女に  
たすけてもらえないかと、おねがいをしました。

「<sup>くに</sup>国に住んでいる みんながこまっているのじゃ…。  
<sup>まほう</sup>魔法をつかって、この<sup>くに</sup>国に<sup>あめ</sup>雨をふらせることはできないか？」

<sup>まじょ</sup>魔女はいいました。

「ごめんなさい。わたしの<sup>まほう</sup>魔法でも<sup>あめ</sup>雨をふらすことはできないわ。  
でも、<sup>たからじま</sup>宝島にすんでいる<sup>まじょ</sup>妖精ならきっとチカラになってくれるはずよ」

<sup>まじょ</sup>魔女はバッグのなかから1枚の<sup>まいちず</sup>地図をとりだして、  
そこに<sup>ほしごし</sup>☆印を3つ書きました。  
「この☆印の<sup>ほしごし</sup>ばしよに住む<sup>さん</sup>3人の<sup>まじょ</sup>妖精をたずねなさい」



王様はすぐにウィル王子をよびつけました。

「ウィルよ。この国がこまっていることは知っているな？  
国のみんなに、このまま くるしい思いをさせてはいけないのじゃ」

と、魔女からもらった地図をわたして、  
宝島とそこに住む三人の妖精の話をしました。

でもこわがりなウィル王子はふるえてしまいます。

「一人で旅にでるなんて怖いよ…」

ウィル王子はこれまで  
一度もお城の外に出たことがなかったのです。

そんなウィル王子に、  
魔女は魔法の杖をわたしました。



「あなたならきっと大丈夫よ。

旅の途中で本当にこまった時は、この杖がたすけてくれるはず」

魔法の杖をうけとると、

ウィル王子のココロにふしぎと勇気がわいてきました。

「うん、わかった！ ほくだってみんなをたすけたいんだ！」

旅のじゅんびをしたウィル王子は、魔法のチカラをかりながら、

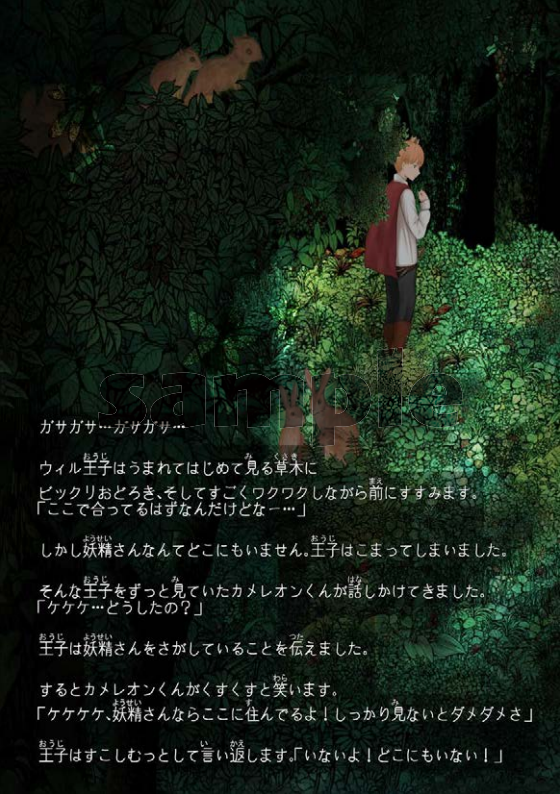
まずは砂の国からはるかとおくにある海まで行き、

それから船に乗って、3日かけてようやく宝島にたどりつきました。

王子は地図を見ながら、目の前の森にはいっていきます。

sample



A young man with orange hair, wearing a white shirt, dark pants, and a red backpack, stands in a dense, lush green forest. He is looking towards the right. The forest floor is covered in various green plants and flowers. The background is filled with large, dark green leaves and branches, creating a sense of depth and mystery.

ガサガサ…ガサガサ…

ウィル王子はうまれてはじめて見る草木に  
ビックリおどろき、そしてすごくワクワクしながら前にすすみます。  
「ここで合ってるはずなんだけどな…」

しかし妖精さんなんてどこにもいません。王子はこまってしまいました。

そんな王子をずっと見ていたカメレオンくんが話しかけてきました。  
「ケケケ…どうしたの？」

王子は妖精さんをさがしていることを伝えました。

するとカメレオンくんがくすくすと笑います。  
「ケケケケ、妖精さんならここに住んでるよ！しっかり見ないとダメダメさ」

王子はすこしむっとして言い返します。「いないよ！どこにもいない！」




カメレオンくんはブンブン怒る王子を見てもっと笑います。

「ケケケケ！ダメダメ、王子はぜんぜん ちゃんと見てないよ。  
木や草は同じように見えるけど、ひとつひとつ違うものなんだ。  
じいっと見てごらんよ、しっかり見ないとわからないさ！」

王子はカメレオンくんに笑われて、とつてもくやしくなって、  
さっきよりずっと真剣に妖精さんをさがしました。





「あっ！妖精さんだ！」

まわりをずうっとじいっと見ていた王子は、  
ようやく自分の周りを飛び回る妖精さんを見つけました。

なにも見えないでいたのは、妖精さんがいることを信じずに、  
しっかり見ようとしていなかったからなのです。

たくさんの妖精さんが森の中であそんでるのを、  
今はしっかり見ることができます。

「ははは！やっとみつけてくれたんだ！」

ひとりの妖精さんが王子の前にふわりととんできます。



A magical forest scene at night. The background is filled with dense green foliage and trees. Several glowing fairies with large, translucent wings are scattered throughout the scene, some perched on branches and others in flight. In the center, two large owls with glowing yellow eyes are perched on a tree branch. To the left, a prince with long brown hair and a crown is visible. The overall atmosphere is enchanting and mysterious.

sample

おうじ はな  
王子は話しかけます。

「はじめまして、妖精さん。ほくはウィル王子。あなたを探していたんだ。」

どうせい  
妖精さんはにこっと笑ってくれました。

「はじめまして、ウィル王子。おいらは森の妖精だよ。」

どうせい  
「どうしておいらを探してたんだい？」

おうじ すな くに た もの そだ  
王子はゆの国では食べ物が育たず、

みんながお腹がすかせて困っていることを伝えました。

しり どうせい  
森の妖精さんは最後まで話を聞いたあと、またにこっと笑い、

「うん、わかった！力になるよ」と約束してくれました。



ちずみを見ながらしばらくある歩いていると、  
いつしかもりをぬけてひろい原っぱにでました。  
「うーん…このあたりでまちがってないはずなんだけどな…」

おうじもりなかでカメレオンくんにおし教えてもらったように  
まわりをじいっと見てみますが、妖精さんはどこにもいません。

み見つけたのは雲の上まで伸びているすごくたかい木だけです。  
つかれてしまったおうじは、とりあえずこの木の下で休むことにしました。



sample

王子が休んでいると、木の枝に1羽のトリさんがとまりました。  
「あら？あなたは砂の国の王子じゃない？」

おどろいた王子はトリさんにききます。  
「どうしてほくのことを知っているの？」

トリさんはその大きなハネを広げて言いました。  
「世界中のあちこちへ飛んでいってるのよ。  
あなたのことももちろん知っているわ。  
ところでどうしたの？なにかこまっていることでもあるの？」

王子はまわりをじっくり見て、しっかりさがしてみても  
妖精さんがどうしても見つからないことを話しました。

するとトリさんはやさしく笑いました。  
「地面ばかり見ていたらダメなの。  
空から見ないと、わからないことだってあるのよ。  
妖精さんはこの木のてっぺんにいるわ」



sample

「ん〜、どうやってのぼろうか…」

王子は目をこらして、  
目の前の大きくてたかいたかい木を  
しっかりじっくり見てみます。

木はつつるつつしているわけではありません。  
小さなくぼみや、  
トリさんがとまっているような枝だってあります。

「よし、ここからのぼってみよう」

王子は  
つよい風にピューピューヒュルルンとふかれながらも、  
落ちないように慎重に木をのぼっていきました。



ながいながい時間をかけて、ようやく木のてっぺんまでたどりつくと、  
そこでは たくさんの妖精さんが風によってあそんでいました。  
王子は妖精さんに話しかけます。

「はじめまして妖精さん。ぼくはウィル王子。あなたを探していたんだ。」

妖精さんはニカッと笑ってくれました。

「はじめまして、ウィル王子。オレは風の妖精だ！ どうしてオレを探してたんだ？」

王子は、砂の目には風がふかず、あつくてあつくて

とてもこまっていることを伝えました。

風の妖精さんは最後まで話を聞いたあと、またニカッと笑って、

「よかったです！ いつでもすずしい風を運んでやるぜ！」と約束してくれました。

sample

おうじ さんじんめ ようせい あ い  
王子はついに三人目の妖精さんに会いに行くことにしました。

ちず すすんでいくと、たどり着いたのは、なんと海！！

「あれれ？道を間違えたかな？」

おうじ まちが ないか さが  
王子はほかに道がないかと探しますが、  
やっぱり道は合っているようです。



国<sup>くに</sup>の<sup>しん</sup>印<sup>いん</sup>の<sup>は</sup>し<sup>よ</sup>、<sup>よう</sup>せい<sup>せい</sup>の<sup>す</sup>妖精<sup>ようせい</sup>さん<sup>の</sup>住<sup>す</sup>む<sup>ば</sup>し<sup>よ</sup>は<sup>う</sup>み<sup>なか</sup>海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>な<sup>の</sup>で<sup>し</sup>た<sup>。</sup>。

「どうしよう…ほくは泳<sup>およ</sup>げないんだ…」

お<sup>う</sup>じ<sup>は</sup>、この<sup>し</sup>ま<sup>の</sup>島<sup>しま</sup>に<sup>ふ</sup>ね<sup>の</sup>船<sup>ふね</sup>に乗<sup>の</sup>って<sup>や</sup>っ<sup>て</sup>き<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>が、  
実<sup>じつ</sup>を<sup>い</sup>う<sup>と</sup>、その<sup>と</sup>き<sup>に</sup>は<sup>は</sup>じ<sup>め</sup>て<sup>う</sup>み<sup>み</sup>海<sup>うみ</sup>を<sup>み</sup>た<sup>の</sup>で<sup>し</sup>た<sup>。</sup>。

もちろん泳<sup>およ</sup>いだ<sup>こ</sup>と<sup>だ</sup>っ<sup>て</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>せ</sup>ん<sup>。</sup>  
砂<sup>すな</sup>の<sup>くに</sup>国<sup>くに</sup>には<sup>う</sup>み<sup>も</sup>海<sup>うみ</sup>も<sup>か</sup>わ<sup>も</sup>川<sup>かわ</sup>も<sup>な</sup>い<sup>の</sup>で<sup>す</sup>か<sup>ら</sup>。

「……あっ！」

お<sup>う</sup>じ<sup>は</sup>し<sup>ば</sup>ら<sup>く</sup>な<sup>や</sup>ん<sup>で</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>が、  
ま<sup>じ</sup>よ<sup>の</sup>魔<sup>ま</sup>女<sup>じよ</sup>さん<sup>か</sup>ら<sup>も</sup>ら<sup>っ</sup>た<sup>ま</sup>ほう<sup>の</sup>魔<sup>ま</sup>法<sup>ほう</sup>の<sup>つえ</sup>杖<sup>つえ</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>お</sup>も<sup>い</sup>だ<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>。</sup>。

「魔法<sup>まほう</sup>の杖<sup>つえ</sup>さんおねがいます！」

ほく<sup>を</sup>海<sup>うみ</sup>で<sup>およ</sup>げ<sup>る</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>し</sup>て<sup>く</sup>だ<sup>さ</sup>い<sup>！</sup>」

お<sup>ね</sup>が<sup>い</sup>を<sup>し</sup>た<sup>と</sup>たん<sup>途</sup>端<sup>たん</sup>、  
杖<sup>つえ</sup>は<sup>ピ</sup>カ<sup>ピ</sup>カ<sup>ッ</sup>と<sup>ひ</sup>か<sup>り</sup>、お<sup>う</sup>じ<sup>の</sup>王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>の<sup>か</sup>ら<sup>だ</sup>体<sup>からだ</sup>を<sup>つ</sup>つ<sup>み</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>。</sup>。

「まぶしい！」

すこ<sup>し</sup>して<sup>お</sup>う<sup>じ</sup>王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>が<sup>め</sup>目<sup>め</sup>を<sup>あ</sup>け<sup>ると</sup>、  
ス<sup>ラ</sup>ッ<sup>と</sup>の<sup>び</sup>て<sup>い</sup>た<sup>は</sup>ず<sup>の</sup>お<sup>う</sup>じ<sup>の</sup>王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>の<sup>あ</sup>し<sup>は</sup>足<sup>あし</sup>は<sup>ビ</sup>タ<sup>リ</sup>と<sup>く</sup>っ<sup>つき</sup>、  
い<sup>つ</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>か</sup>お<sup>い</sup>し<sup>の</sup>魚<sup>いしな</sup>の<sup>あ</sup>し<sup>ヒ</sup>レ<sup>は</sup>足<sup>あし</sup>ヒ<sup>レ</sup>に<sup>な</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。

お<sup>う</sup>じ<sup>は</sup>人<sup>にんぎよ</sup>魚<sup>ぎよ</sup>へ<sup>と</sup>変<sup>へん</sup>身<sup>しん</sup>し<sup>た</sup>の<sup>で</sup>す<sup>！</sup>！



# ざっぶーん！

海にとびこんだ王子はすいすい泳いでいきます！

「うわー！すこーい！」

海の中は不思議できれいなものがたくさん！

太陽のヒカリが海にさしこみ、王子のまわりにはいろんなお魚が泳いでいます。

海の底にはサンゴ礁がひろがっていて、まるで宝石箱のようだとおもいました。

sample





sample

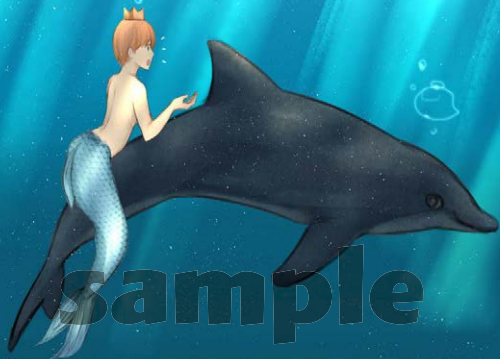
「あれ…あれれ…？」

王子は☆印のばしょまで一直線に泳いでいました。  
しかし、もうすこしでその場所につくはずなのに、  
なぜか後ろへと押し戻されてしまいます。

どうやらこれ以上、先にはすすめないようです。

すると、王子の前にスイ〜っとイルカくんたちが泳いできました。

「どうしたの？」



王子はここから先にどうしても進めないこと、  
そして妖精さんをさがしていることを伝えました。  
イルカくんはこころよく道案内をひきうけてくれました。

「こっちさ、ついてきて！」

地図をみたイルカくんは、王子とは逆ほうこうに泳ぎだします。

「ちがうよイルカくん、そっちじゃないよ」

王子が首をかしげると、イルカくんはやさしく教えてくれます。

「ううん、あってるよ。海には潮の流れというのがあるね、  
その流れにうまくのらないと、前には進めないんだ」

イルカくんといっしょに、海をおよいで進んでいきます。  
ずっとずっとおよいで、海の底にある まっくらな洞くつをぬけていきました。  
そこでは、妖精さんがお魚さんといっしょにあそんでいました。

王子は妖精さんにはなしかけます。  
「はじめまして、妖精さん。ほくはウィル王子。あなたをさがしていたんだ。」

すると妖精さんは、にこっとわらってくれました。  
「はじめまして、ウィル王子。わたしは水の妖精です。  
どうしてわたしをさがしていたんですか？」

王子は砂の国には雨がふらず、水がなくてこまっていることを伝えました。  
水の妖精さんは最後まで話をきいたあと、にこりと笑い、  
「わかりました。わたしがお水をとどけましょう」と約束してくれました。

sample



## 「ぶはー!!」

王子が海からでてきたときには、もうすっかり夜で、あたりはとっても静か。  
まんまるな月に照らされた砂浜に、  
カメレオンくんとトリさんが来てくれました。  
トモダチが来てくれたことに、王子はととてもよろこびました。

イルカくんがチャボンっと海から顔をだして、王子をほめます。  
「おつかれさま、よくがんばったね」

カメレオンくんもトリさんも同じようにほめてくれます。  
もちろん王子はうれしくなりましたが、ふるふると首を横にふりました。

「ううん。みんなのおかげだよ。」

ほくだけじゃ三人の妖精さんには、きっとあえなかったとおもう。

ありがとう

sample

三人のトモダチは王子が船に乗るところまで、みおくることにしました。  
王子もたすけてくれたみんなと別れて帰るのがいやだったので、  
もと来た道ではなく砂浜をあるいて、遠回りをして船にもどることにしました。

王子はおもいだします。

森ではたくさんの木々に囲まれ、

そこにすむ、たくさんのドウブツやムシさんたちを見たこと。

たかい木をのぼって、どこまでもひろがる空を見たこと。

空とおなじように広い海と、

そこで泳ぐたくさんの魚と、美しいサンゴ礁を見たこと。

王子が城に閉じこもったままでは、どれも見ることができなかつたでしょう。

sample





くに につくと、あのあつくて かわ 乾ききった すぎ くに 砂の国はどこにもありませんでした。

もり ようせい 森の妖精さんのおかげで、  
まるであの 宝島の森のように 木々が 生い茂っています。

かぜ ようせい 風の妖精さんはあつかったこのくに、すずしい風を運んでくれています。

みず ようせい 水の妖精さんはこのくに 雨をふらせて、

それはそれは 美しい湖を作ってくれました。



「ウィル！よくやったのう、おかえり」

王さまがニッコリと笑って、あたまをなでました。  
国にすむみんながウィル王子をむかえてくれます。  
くるしそうな人なんてだれ一人もいません。  
みんながニコニコとわらっています。  
王子はその顔を見て、とてもうれしくなりました。

「みんな、ただいま！」

みんながくるしんでいた『砂の国』は、  
みんなが笑顔の『みどりの国』とよばれるようになり、  
ウィル王子はやがて立派な王様となりました。

そしてウィルは王様となった今でもみんなに話すのです。  
宝島で出会ったトモダチと、妖精さんたちのことを。

sample



いしだえほん No.0195

# 砂の国のウィル王子

2019年10月4日 初版発行

作 ぶっちー  
初期原案 わんぱくおじさん

印刷・製本・発行 石田製本株式会社  
〒063-0836 北海道札幌市西区発寒16条14丁目3-31  
TEL 011-676-4520  
<http://i-bb.co.jp/>

©2019 Butchi / Wanpaku Ojisan / Ishida Bookbinding

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁はお取り替えいたしますので、弊社までご連絡ください。

ISBN978-4-909939-94-4

石田製本の通販サイト「いしだえほん」にて、  
シリアスな物からシュールな物まで、楽しい絵本が続々発売中です！  
<http://p-books.jp/ehons/>

**sample**

ISBN978-4-909939-94-4  
C8771 ¥1200E

定価：本体1,200円+税



9784909939944



1928771012000

